

京極家激闘譜

— 京極氏の遺跡、信仰、文化 —

米原市教育委員会
2011.3



京極家激闘譜

—京極氏の遺跡、信仰、文化—

—目次—

京極氏のふるさと・米原市	2
京極家激闘譜 1～3	3
清滝寺徳源院—京極家の菩提寺—	4
能仁寺遺跡の発掘調査	5
京極家激闘譜 4～6	6
史跡「京極家墓所」	7
京極家激闘譜 7～9	9
京極氏の遺跡① 太平寺跡	10
コラム：京極氏と家臣団の山城	
京極氏の遺跡② 京極氏館跡	11
コラム：京極氏家臣団	
京極氏の遺跡③ 家臣屋敷跡と城下	13
京極氏の遺跡④ 上平寺城跡	14
コラム：上平寺区有文書	
京極氏の遺跡⑤ 弥高寺跡	15
京極家激闘譜 10～12	16
京極高次と初	17



近江源氏佐々木氏の分流京極氏は、鎌倉時代中頃に佐々木信綱の四男氏信が、北近江の愛知川以北六郡と柏原の館を与えられ、京都の京極高辻に屋敷を構えて「京極氏」と名乗ったことに始まります。

佐々木氏の分家にすぎなかった京極氏は、南北朝の内乱での京極道誉や、応仁の乱での持清の活躍により、室町時代には本家佐々木六角氏をしのぐ勢力を持ちます。戦国の世には北近江上平等寺に本拠を構えますが、家臣浅井氏の台頭により、浅井長政が戦国大名として成長すると、いったんその名は歴史から消えてゆきます。

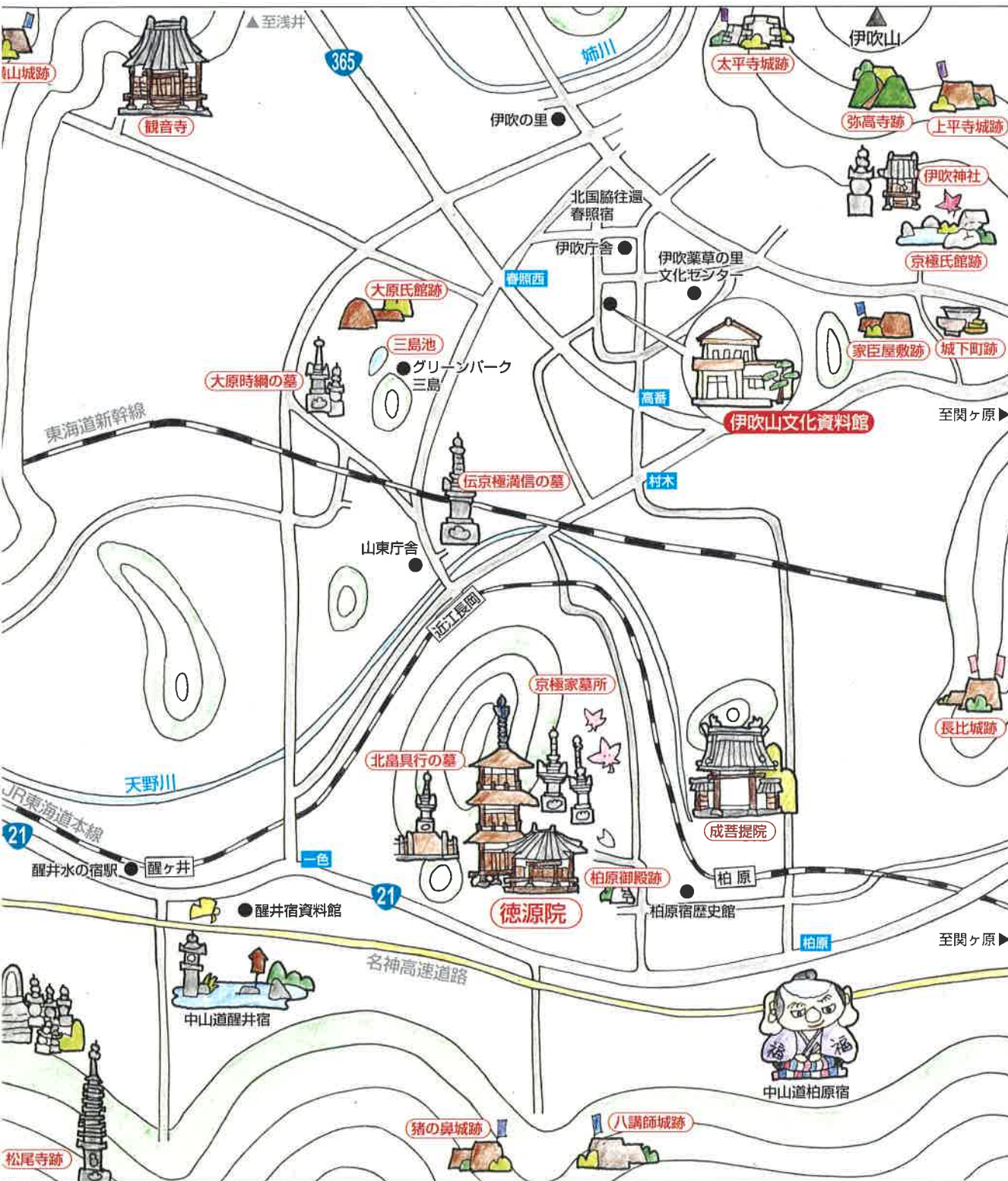
しかし、京極高吉やその息子の高次らの名門復活に懸ける闘いによって、京極家は復興し、江戸時代には四大家名・一旗本家として存続します。日本の中央にある近江を本拠にしながら、鎌倉時代から明治維新まで約650年間大名家として続いた、全国的にも稀有な一族であったといえます。その激闘の記録を紹介します。

▲至長浜 北陸自動車道
▲至彦根

山内一豊母の墓 坂田 8 JR北陸本線 近江母の里 若宮氏館跡 朝妻城跡 米原 米原庁舎 鐵山城跡 北国街道米原宿 西門寺 近江庁舎 日撫神社 近江はにわ館 箕浦城跡 今井家墓所 新庄家墓所 地頭山城跡 米原JCT 中山道番場宿 蓮華寺 鎌刃城跡

京極氏のふるさと・米原市

寛文12年(1672)、丸亀藩二代藩主京極高豊は、荒廃していた菩提寺・清滝寺(清滝)を復興して、初代藩主高和の院号から徳源院と称しました。そして周辺に点在していた京極家歴代の墓石を集め、京極家墓所(国史跡)を整備しました。米原市にはこのほかにも、京極道誉が法華経を納めて祈願所とした青岸寺(米原)、伊吹山寺の衆徒とともに北条軍を襲撃した蓮華寺(番場)、道誉がやむなく斬首した北畠具行の墓(柏原/国史跡)、京極氏の動向をうかがうことができる大原観音寺の古文書群(朝日/県指定)など、城館跡のみならず、京極氏やその一族に関するさまざまな文化財や遺跡があり、米原市はまさに京極氏のふるさとといえることができます。



米原市の京極氏関連遺跡・文化財イラストマップ

1 京極氏誕生！

近江の守護大名佐々木信綱には、長男重綱を筆頭に高信・泰綱・氏信の四人の息子がいました。

仁治2年(1241)、信綱の跡を継いだのは三男の泰綱です。泰綱の母が北条義時の養女であったことから、小脇(東近江市)にあった佐々木氏の館と京都六角東洞院の館、愛知川以南六郡の地頭職を与えられ「六角氏」を名乗ります。氏信は「京極氏」を名乗りました。

ほかの二人の息子も近江国内に割拠しながら、京都の幕府軍の構成員となります。長男重綱は、坂田郡大原荘に居館を構え大原氏を名乗ります。高信は高島郡田中荘を領して高島氏を称しました。

2 婆娑羅大名道誉の活躍

京極家の五代目は婆娑羅大名と呼ばれた道誉(高氏)です。鎌倉時代末期には、後醍醐天皇の隠岐島配流に幕府の将としてつき従い、捕らえられた北畠具行を柏原で斬首するという、鎌倉幕府に忠実な武将でした。しかし、足利尊氏が蜂起するやいち早くはせ参じ、以後、一貫して行動をとものにします。

一方の佐々木本家六角時信は、最後まで北条氏に従い、六波羅探題北条仲時ら430名が番場の蓮華寺で自刃して、ようやく足利方に従います。時信はこのとき同族の道誉に仲介を頼んでいます。本家の六角氏が、分家の京極氏を頼らなければならなかったという出来事は、両家の力の逆転をみごとに表しています。

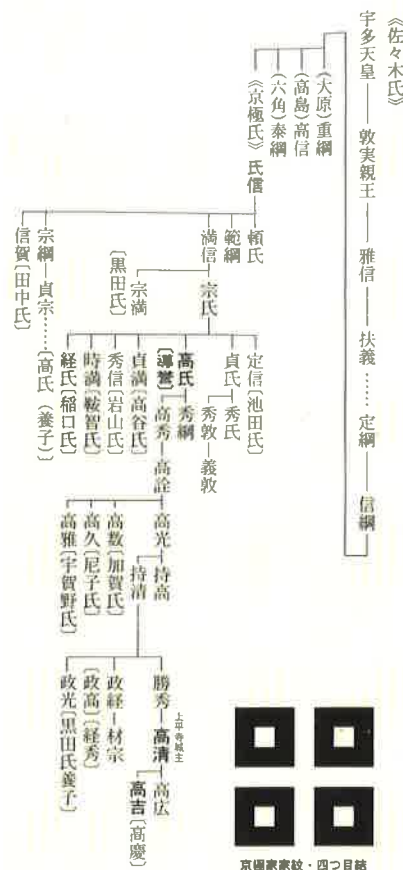
続く南北朝時代は権力欲をむき出しにした泥沼化の様相を見せまします。そのなかで道誉の先見性は発揮され、着々と幕府内での立場を固め、京極氏としてはじめて一国の守護(若狭国)に任ぜられ、建武6年(1338)には近江守護に任命されます。やがて飛騨・出雲・隠岐三ヶ国の守護職も手に入れます。京極家繁栄の基礎は、まさしく道誉の獅子奮迅の働きによって固められました。

3 応仁の乱勃発

応仁の乱(1467~77)が勃発したとき、京極家の当主は持清で59才の老練の武将です。幕府の侍所長官の要職にあり、領国である北近江、飛騨、出雲、隠岐の兵力を率いて、東軍細川方に参戦します。一方、六角氏はわずか10歳前後の高頼を、伊庭氏などの重臣が補佐して西軍の主力になります。同族で本家・分家の関係だった六角氏と京極氏は、このとき完全に敵対関係に入ります。

六角氏の居城・観音寺城は、山中全域に数百の平地がならぶ日本の五大山城のひとつです。大乱勃発直後、持清は観音寺城を攻め、守将伊庭雪隆を敗死させ、その勢いのまま翌年には近江一国を制圧します。六角高頼は、伊賀・甲賀でゲリラ戦を試みますが、持清の子勝秀にふたたび観音寺城を攻略されてしまいます。

文明元年(1469)、持清は六角氏に代わって近江守護に任命されました。道誉以来130年ぶりに京極氏が近江一国の守護大名となりました。持清は京極氏歴代の中で道誉に次ぐ智将といわれています。しかし、つねに六角氏を圧倒し続けた京極家は、文明2年に持清が病没したことによって波乱の時代を迎えます。



佐々木氏・京極氏系図



沙沙貴神社 (近江八幡市安土町)



道誉の菩提寺・勝楽寺 (甲良町)

清滝寺徳源院

— 京極氏の菩提寺 —

清滝寺は、初代氏信が創建したとされます。創建年代は不明ですが、弘安^{こうあん}9年(1286)の文書が残ることから、このころには存在していたのは確実です。氏信が没したとき、その墓は清滝寺境内に営まれ、以後、京極家の墓所、菩提寺として栄えました。室町幕府の重鎮であった京極道誉も、近江における拠点として利用し、元弘^{げんこう}の変で捕えられた北畠具行も、道誉に護られ清滝寺で約1ヵ月休息しています。応仁の乱以降、京極氏の内紛や浅井氏の勃興により衰退しますが、寛文12年(1672)、丸亀藩主京極高豊^{はりま}は、清滝周辺と播磨の領地を交換し、歴代墓地の修復や三重塔の建立、12坊を復活させるなど寺観を復興しました。



徳源院境内図



徳源院庭園測量図

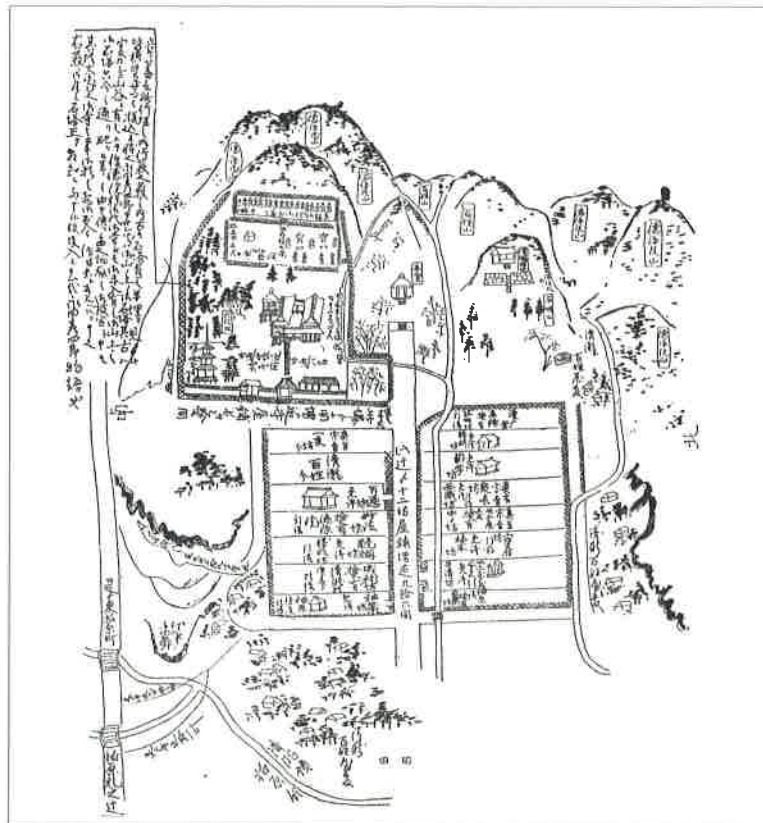


柏原館跡（清滝）

柏原庄の地頭柏原弥三郎は、悪行により佐々木氏に追討され、館は京極氏に引き継がれました。のちに清滝寺が建立されますが、京極道誉もしばしば逗留していることから、居館としての機能を備えていたと考えられます。在京御家人として京都を拠点としていたころの京極氏の城館はこの柏原館であったといわれます。



清滝寺遺跡全景



徳源院古絵図（『滋賀県史蹟調査報告書第5冊』）

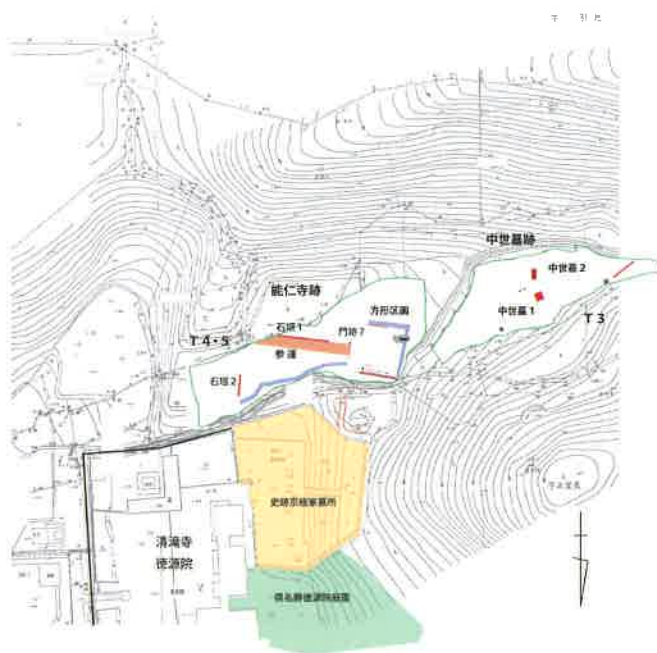


三重塔（県指定）

能仁寺遺跡の発掘調査

— 七代京極高詮の菩提寺 —

能仁寺遺跡(清滝)は、平成20年から滋賀県教育委員会によって発掘調査がおこなわれています。ここは、能仁寺谷とよばれ、能仁寺跡との伝承がありました。寺伝には京極家第七代高詮の戒名が「能仁寺殿乾嶺浄高大居士」で、高詮の菩提寺とみられます。谷の上方の調査では、長方形基壇の中世墓が2基見つかりました。そのうちのひとつには5基の五輪塔の基礎が据えられ、周辺に上の部材が散乱していました。「貞治(三)年(1363)」銘のある宝篋印塔が出土していることから、南北朝時代から墓地として使用されていることがうかがえます。下(東)方では、寺院の中心部である方形基壇(南北約12.5m×東西約14m)が検出され、基壇東辺で山門の遺構、そこから東へ伸びる参道(幅約3m×延長17m)と石垣(長さ14m×高さ1.5m)が見つかりました。方位をそろえた基壇・山門・参道や背後の墓地、出土遺物に日常雑器が少なく、精良な土器が目立つことなどから中世寺院跡と考えられ、土器の年代観から応永8年(1401)に没した高詮の菩提寺と考えられます。



能仁寺遺跡発掘調査概要図

平成20・21年には、能仁寺跡の下流部分の発掘調査で、清滝寺に関連すると思われる坊跡の一部らしい石組み造成の屋敷地、掘立柱建物跡、五輪塔の笠部を組み合わせた井戸、石組み溝、石組み暗渠などが見つかりました。



香炉出土状況 (基壇)



井戸跡 (東側坊院跡)

歴代の菩提寺

第五代高氏は墓所のある「勝楽寺」(甲良町)、第八代高氏は「勝願寺」で勝願寺跡が清滝にあります。第十代高氏は満願寺(万願寺)で、京極氏当主の戒名の寺院名は菩提寺・墓所の所在を示し、市内外に伝承地があります。能仁寺遺跡は守護大名の菩提寺が明らかにされた貴重な資料です。



能仁寺基壇跡



参道と石垣



上段中世墓

4 京極家分裂！

応仁の乱で持清とその子勝秀を相次いで亡くした京極家に、家督相続をめぐる争いがおこります。京極^{たかきよ}高^{まさみつ}清を後見する叔父の政光^{まさみつ}に対し、出雲・隠岐の守護大名京極^{まさつね}政^{たねひね}経(政光の兄)・材宗^{たかただ}親子が、北近江も手に入れようとして近江に乱入し、これに重臣の多賀宗直^{むねなお}、多賀高忠らの京極家内における主導権争い^{たかただ}が加わります。

さらに、足利将軍家や隣国の六角・斎藤・朝倉らが介入して、北近江は麻のように乱れます。高^{たか}清は、何度も北近江を追われ、敏満寺(多賀町)、三雲(甲賀市)、敦賀(福井県)、坂本(大津市)、海津(高島市)などに逃れています。永正2年(1505)の冬、ようやく日光寺^{にっこうじ}で高^{たか}清と材宗^{たかただ}の間に和睦が成立します。当時の軍記物には「以後二五年間(北近江は)平和であった」と書かれています。

5 上平寺の館と京極高^{たか}清

上平寺の京極氏館(国史跡)は、混乱を収束させた高^{たか}清が、北近江の安定と領民の平和を願って、それまでの柏原館を廃して、新たに築城した北近江の政治拠点です。『上平寺城絵図』(市指定)には、今の上平寺集落から寺林にかけて、武家屋敷や町人屋敷があったことが描かれています。これは、近江で最古の城下町でした。北近江各地の武士たちが集まり、京極氏との主従関係を確認する儀式がおこなわれたであろう京極氏庭園跡は、京極氏が京都の文化を伊吹山麓に持ちこみ、花開いていたことを物語ります。

上平寺の館を拠点とする京極高^{たか}清の政権確立には、上坂^{こうざか}・井口^{いのくち}・浅見^{あさみ}などの湖北の有力家臣の力がありました。なかでも上坂^{いさのぶ}家信は京極家において発言力を強め、専横的な態度をとったため、古くからの家臣たちと対立を深めていきました。家信の跡を継いだ^{のぶみつ}信光も同様の態度をとったため、他の家臣団との対立は増大し、京極氏を巻き込んでいきます。



上平寺城下概要図

6 大吉寺梅本坊公事

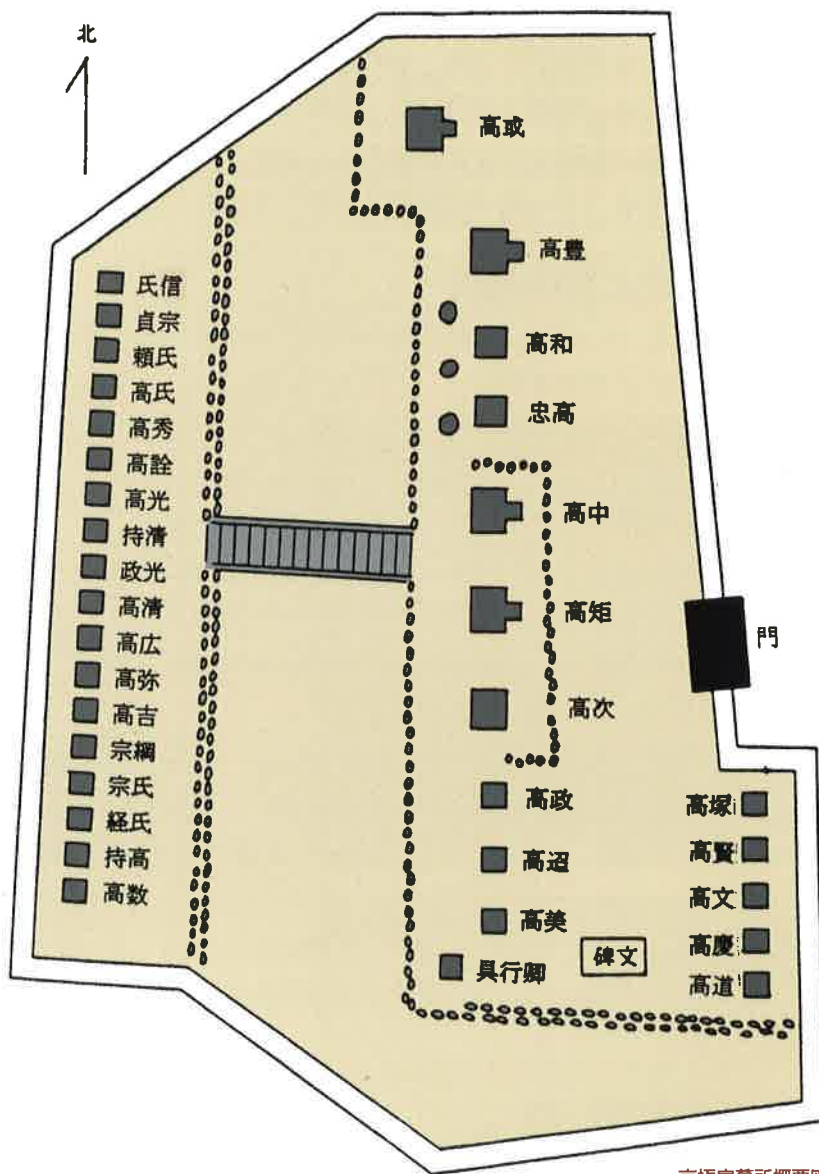
家臣の対立が深まるなか、京極氏の継承問題が起こります。高^{たかのぶ}清には高延(長男、のちの高^{たかひろ}広)と高慶(二男、高^{たかよし}吉)の二人の男子がいました。高^{たか}清は高慶を後継者と考え、これを推す上坂^{こうざか}信光と、高延を擁立する浅井・三田村・堀・今井らの対立が表面化します。大永3年(1523)、大吉寺(長^{うめもとぼう}浜市)の梅本坊という小寺院で公事^{こうじ}がおこなわれました。「公事」とは訴訟のことで、京極氏の後継問題が争われたようです。

『江北記』によると、公事の結果(高慶の京極氏相続か)に不満をもった浅井亮政^{すけまさ}らは、尾上城(長^{おのえじょう}浜市)の浅見貞則^{さだのり}を盟主として、信光を倒し北近江の秩序を回復しようと決起します。

亮政らの軍は、信光の居城今浜城(長^{いまはまじょう}浜市)を攻め落としました。信光は、高^{たか}清一族とともに上平寺の館へ、さらに伊吹山中腹の山城・上平寺城に入りますが、高延を上平寺城にのこして、高慶とともに尾張(愛知県)へ落ちてゆきます。高延は尾上城に迎えられ京極氏を相続することができました。しかし、これは北近江の守護京極氏の相続に家臣が介入したということになり、京極氏の権力の弱体化を表すものでした。



大吉寺(長浜市)



京極家墓所概要図



相輪

笠

塔身

基礎



近世墓所 (下段)



京極高次石廟



京極高中木廟

極家墓所



右から氏信(初代)・貞宗・頼氏・高氏・高秀・高詮・高光・持清



右から政光・高清・高広・高弥・高吉・宗綱・宗氏・経氏



右から持高・高数

中世墓群(上段)



京極家墓所全景

丸亀藩二代藩主京極高豊は、初代高和の墓所を造営するにあたって、そのころ、すでに廃寺に近い状態だった初代氏信の菩提寺・清滝寺を京極家の墓所としました。墓所の整備は、近隣に散在していた初代氏信より一八代高慶(高吉)まで(一二代、一四代欠)と、頼氏、^{よりのうじ}経氏の18基の宝篋印塔を集めて補修し、墓所の上段としました(昭和7年国史跡)。下段には、京極家中興である一九代高次の石製霊屋を中心^{たどつほん}に歴代丸亀藩主の墓所と多度津藩歴代の墓所、さらに北畠具行の宝篋印塔が16基と、丸亀藩6代藩主高朗^{あき}の讚骸塚、忠高・高和に殉死した家臣の五輪塔6基が配置されています(平成14年国史跡)。

近世大名墓は、国許に造営される場合と、国許と江戸の亡くなった場所で造営されることがほとんどで、丸亀・多度津藩京極家のように先祖の埋葬地である米原に葬るとするのは極めてまれな事例です。そのうえ、鎌倉以来の先祖の墓も一堂に集めて一族の墓所とし、先祖の地を聖地化したというのは京極家墓所しかありません。(中井均「丸亀藩・多度津藩京極家墓所」2010『近世大名墓所調査の現状と課題』)

7 京極親子と浅井亮政

主君京極高^{たか}清や高^{たか}延を立てながら、小^お谷^{たに}城^{じょう}を拠点に勢力を伸ばしつつある浅井亮政^{あらいりやうせい}に対し、南近江の六角定頼^{むしかたさだより}は、大永5年(1525)、大軍を率いて小谷城を攻めます。亮政は、主君高^{たか}清や上坂信光らとともに防戦しますが、落城して美濃へ逃れていきます。

一方、大吉寺梅本坊公事で尾張に落ち延びていた高慶^{たかえい}が、河内城^{かわちじょう}(梓河内)に入り、兄高延に代わって京極家相続の機会をうかがっていました。享禄元年(1528)、高慶は内保河原(長浜市)で高延と戦います。この戦いは高延を立てる亮政と、高慶を支持する六角定頼との争いで、亮政はこの戦いに勝って北近江の足場を固めます。

天文3年(1534)、亮政は小谷城下の清水谷の館で、京極高^{たか}清・高延親子や京極家の一族と主だった家臣を招き、二日間にわたって、たいへんごちそうや、贈り物をしてもてなしました。献立の中には、琵琶湖や小谷山周辺でとれる食材のほかに、サザエやサメなどの海の幸も多く、イルカやクジラも登場します。このもてなしでは、亮政が京極高^{たか}清を「御屋形様」と呼び、京極家のなかで一番大切な家臣であること、豊かな経済力をもつ実力者であることを世に知らしめる一大デモンストレーションでした。



小谷城(長浜市)



小谷城京極丸跡

8 京極兄弟と浅井久政

名実ともに京極家臣団のトップに立った亮政ですが、以後も、京極高慶を支持する六角定頼に何度も攻め込まれ、一時は小谷城からの退去を余儀なくされ、高慶が北近江を支配することもありました。この間、天文7年(1538)には上平寺城主として北近江を治めていた京極高^{たか}清が71歳で波乱の生涯を閉じます。その四年後には亮政が53歳で亡くなります。亮政の死は京極氏や六角氏にとって好都合で、にわか

に湖北に暗雲が立ち込めてきました。浅井亮政の後継者は久政^{ひさまさ}です。一方、亮政の死を機会に、北近江の支配権を取り戻そうとする京極高^{たか}広(高延が改名)は、敵対していた弟の高慶と組んで久政を攻め、天文18年(1549)、ついに小谷城下に迫ります。久政は高広に和解を求め、高広のもとで行政・事務をおこなうこととなります。このように、浅井氏二代久政のころまでは、京極氏も坂田郡南部を拠点に、湖北の「御屋形様」として一定の勢力を保持していました。

9 長政台頭、京極消滅

浅井久政の跡を継いだのが長政^{ながまさ}です。永禄3年(1560)8月、六角義賢^{むしかたよしけん}は浅井方に寝返った高野瀬^{たかのせし}氏の肥田城(彦根市)を攻めるべく二万五千の兵を率いて出陣します。対する長政は一万一千で野良田^{のらだ}(彦根市)に押し出しました。この戦は、当時16歳の長政(当時賢政)の初陣ともいわれ、自ら精兵を率いて六角義賢の本陣に殺到し、六角軍を打ち破りました。この野良田合戦は、浅井の若き跡取りが、鎌倉以来の名門で近江守護の六角氏をわずかな兵力で打ち破り、その名を全国に知らしめることになりました。



浅井長政像(安土城考古博物館蔵)

永禄4年6月頃、賢政は「長政」と名前を改めました。そして、長政は湖北地方の豪族を直接家臣団に組み入れて、軍事面でも領国支配の面でも名実ともに戦国大名として成長していきます。

一方、北近江での復権を虎視眈々と狙う京極高慶も、京極家を再興すべく永禄2年9月に六角義賢と結びました。高慶は旧臣に決起を呼びかけますが、兵が集まらず挙兵にいたりませんでした。このころから、京極兄弟の姿は歴史の闇の中にいったん消えてゆきます。

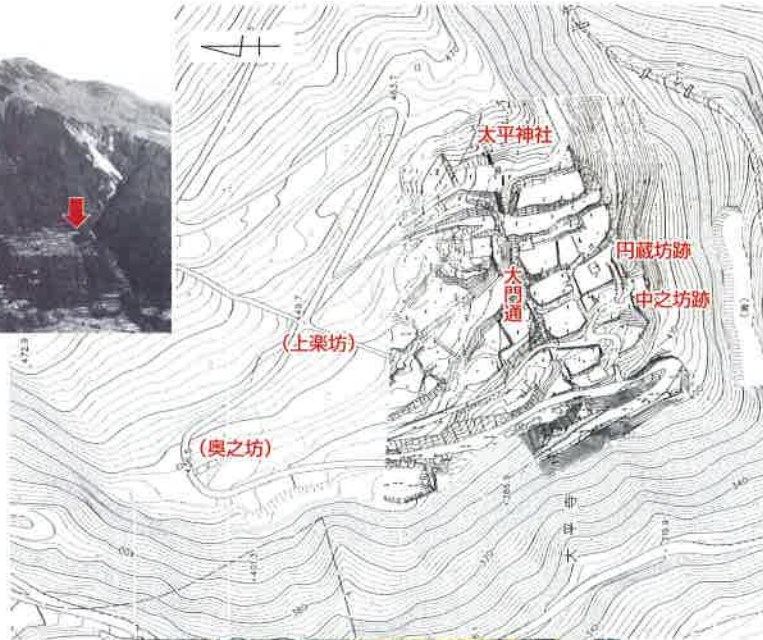
京極氏の遺跡① 太平寺跡

— 山岳寺院を利用したお城（米原市太平寺） —

伊吹山から張り出す尾根の中ほど、標高約450m付近に築かれた山岳寺院が太平寺です。北近江の守護・京極氏は初代氏信以降、太平寺城を拠点にしたともいわれ、山岳寺院の立地と施設を利用した城郭だったと考えられます。元弘3年(1333)、京極道誉と伊吹山寺の衆徒や山伏は、太平寺に逗留していた亀山上皇の皇子守良親王を奉じて、中山道番場宿で京都を追われてきた北条氏の武士団を全滅させる働きをし、鎌倉幕府倒幕に貢献しました。天文5年(1536)の伊吹社奉加帳に35坊がしるされる太平寺は、太平神社(本堂か)を頂点にして、大門通りを中心に坊院が展開し、南端は大富川に面して中之坊跡・円蔵坊跡、北は上薬坊跡や奥之坊跡までの東西約200m×南北約300mの範囲が想定できます。



太平寺跡（昭和28年）



太平寺跡概要図



昭和30年代後半の集落風景



太平寺跡の現状



太平寺跡からの眺望

京極氏と家臣団の山城

市内の京極氏の山城としては柏原城・太平寺城・上平寺城のほか、高広や高吉が拠った猪の鼻城(河内)などがあります。長浜市との境にある横山城の築城時期はわかりませんが、湖北を一望できる立地から京極氏の支城として築城され、のちに浅井氏の南進拠点になりました。

家臣団の山城としては、八講師城(河内)・鎌刃城(番場)・天清城(大清水)などがあります。



史跡 鎌刃城跡



横山城跡からの眺望

京極氏の遺跡② 京極氏館跡

— 北近江初の政治都市（米原市上平寺） —

永正2年(1505)、永く続いていた一族の内紛を、日光寺の講和で納めた京極高きは、山岳寺院・上平寺を改修して守護居館を築きます。上平寺の伊吹神社境内全域が京極氏館跡で、庭園を伴った京極氏の屋敷、一族・重臣の隠岐屋敷や弾正屋敷(大津屋敷)、蔵屋敷といった建物が建ちならんでいたようです。京極氏館跡庭園は、池泉観賞式の庭園で、背後の河戸谷の四季を借景にして、庭園を愛でながら宴や武家の儀式がおこなわれました。また、上平寺は京極高き清の菩提寺で、絵図にも「御廟所」の記載があります。現在、徳源院にある高き清の宝篋印塔はこの地にあったようで、伊吹神社の横に一族の墓地があります。



史跡京極氏遺跡位置図



京極氏館跡



京極一族の墓地



京極氏庭園跡

京極氏家臣団

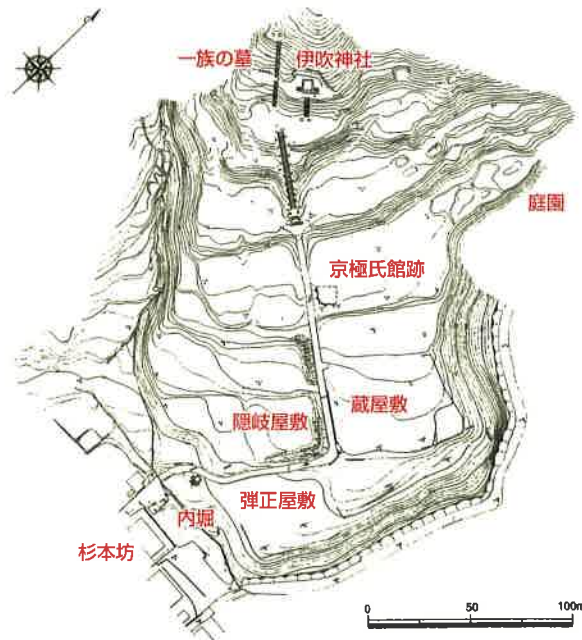
天文年間に京極氏家臣の下坂氏の一族が記した『江北記』には、京極氏の家臣団について次のような書き上げがあります。①古くからの家臣(根本被官)：今井、河毛、今村、赤尾、堀、安養寺、三田村、弓削、浅井、小野、河瀬、二階堂、②応仁の乱以降の家臣：井口、浅見、弓削式部、伊吹、渡辺、平田、③新参の家臣：東蔵、狩野、今井越前、今井十郎、西野、布施、(小足、高宮、隠岐、一圓、慶増)。京極氏の執権的立場だった多賀氏や上坂氏などの名前が見当たりませんが、いずれも北近江各地の有力在地領主です。



今井氏の質浦城跡

— 京極氏館跡発掘調査の成果 —

現況で二段に分かれている京極氏館跡の下段、地表面約40cm下で黄茶色の粘質土層を確認し当時の生活面と判断しました。これが、上段にも続き当時は1面の広大な面積であったことがわかりました。庭園に近接する部分での発掘調査では、上記の生活面に続くと思われる暗茶色の粘質土層を確認しました。調査区の北側を除く全面で直径20~50cmの礎石を約30点検出し、礎石の配列から、東柱が良好にのこる縁のまわる建物と、これと並行する小規模な建物の2棟があったことを確認しました。出土遺物は礎石建物周辺で濃密に分布し、宴の杯や灯りとりとして使われた土師皿や、陶磁器片、釘、古銭などが出土しています。宴や儀式をおこなうための建物(会所)^{かいしよ}だったと考えられます。



京極氏館跡概要図



礎石建物跡 (2次調査)



礎石建物跡 (3次調査)



遺物出土状況

白磁・青磁・輸入陶磁器



筭秤の錘



土師皿

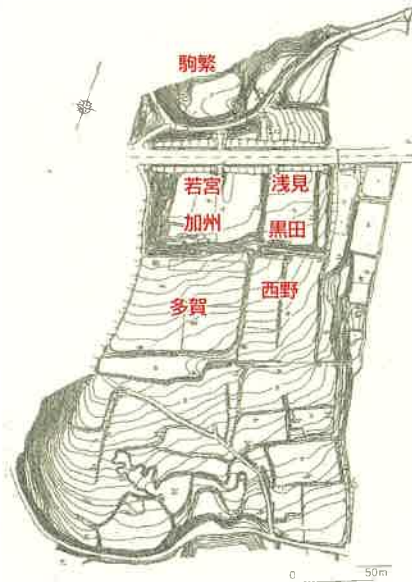
出土遺物

当時の大名の地位を守るものとして「武力」以上に重要だったのは「権威」です。当時、最も高い権威を持つ人物は京都の足利将軍でした。京極氏は、上平寺の居館内に將軍邸のような庭園を設けて宴や儀礼をおこない、京都風の文化を見せつけることで、自らの権力を將軍権力と重ね写して権威付けを図ろうとしました。このような場で使用されたのが「かわらけ」(土師皿)です。一度きりの清浄の器で、かわらけが大量に出土する場所は、非日常的なハレの儀式が頻繁に行われていた特別な空間だったということが出来ます。また、座敷を飾った中国製の青磁片や白磁片など高価な品も出土しています。

京極氏の遺跡③ 家臣屋敷跡と城下

— 北近江の国人の屋敷群（米原市上平寺・藤川） —

京極氏館跡と城下は、東側を藤古川の深い谷、西側は家臣屋敷が並ぶ尾根と要害谷ようがいだにに守られ、南側を外堀で遮断するという「総構え」の構造です。城下の南端には、経済的にも軍事的にも重要な越前街道ほっこくわきわうかん（北国脇往還）を取り込んでいます。家臣屋敷は高殿たかどのとよばれる尾根上にあり、三方を土塁で囲んだ方形の屋敷跡などが並びます。『絵図』には「若宮」「加州」「多賀」「浅見」「黒田」「西野」の北近江各地に拠点を置く六人の家臣の名前が記されています。発掘調査では、礎石や石組遺構、城下への西からの入口にあたる砂利敷きの堀底道、土塁が見つっています。城下町の調査では、掘立柱建物、石組井戸、溝、火葬墓や京極氏時代の遺物が大量に出土しています。



家臣屋敷跡概要図



城下町の発掘



堀底道



京極氏遺跡空撮



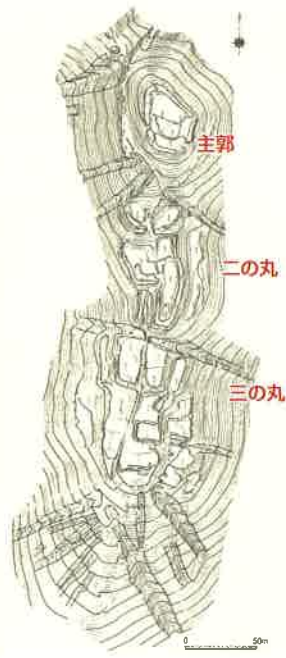
『上平寺城絵図』を読む

京極氏館が廃絶した百年くらいあとの江戸時代初期に、現地の遺構を忠実に、伝承を交えて作られたと考えられています。伊吹山頂を北にして、尾根上の上平寺城と山麓の京極氏館を中心に、その南に城下町、西側尾根上に家臣屋敷、南端に越前街道を描いています。遺構の配置は現状とほぼ一致しており、城下町は武家・町屋・市店いちみせにわかれています。戦国時代の守護館を描いた貴重な資料です。

京極氏の遺跡④ 上平寺城跡

— 京極氏の「詰の城」から「境目の城」へ（米原市弥高・藤川） —

京極氏が上平寺に館と城下を整備したのは、永く続いた京極氏の内紛に端を発したもので、館の背後には「詰の城」の築城が必要でした。上平寺城はこのために築城されたものです。しかし、大永3年(1523)、国人一揆により守護居館の詰の城としての機能は終わり、浅井長政が北近江において主導権を握ると江濃国境の警護の城としての役割を担います。元亀元年、信長の近江進攻では、城将の堀・樋口両名が織田に通じていたことから戦うことなく開城し、以後廃城となりました。上平寺城跡は、要所を堀切・堅堀・畝堀によって防御された連郭式の城郭で、土塁を屈曲させて虎口の防御を強化しています。直線の南北道路の左右に、小規模な曲輪が展開する構造から、中世前期の山岳寺院を改変したとの説もあります。



上平寺城跡概要図



上平寺城主郭跡



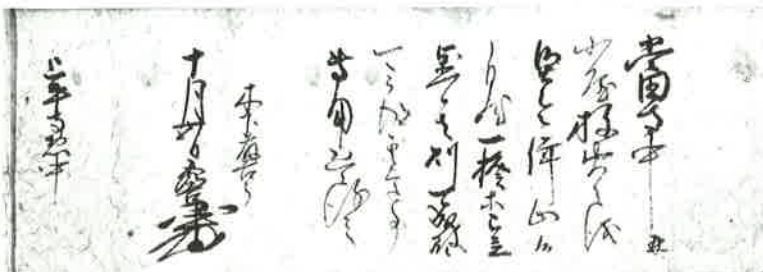
二の丸跡虎口



「境目の城」長比城跡

上平寺城絵図(市指定)

上平寺区有文書



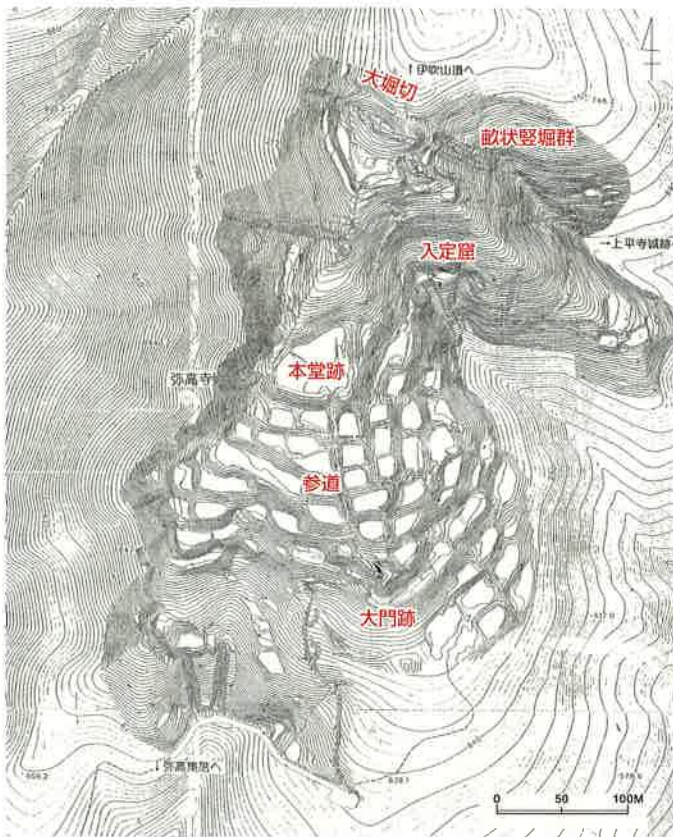
上平寺区有文書

写真は木下藤吉郎を名のるころの秀吉文書で、上平寺の寺坊への放火や一揆の禁止を上平寺村に伝えたものです(年不詳)。このほか上平寺には、天文7年(1537)に黒田氏と多賀氏が連名で、京極高清の供養を上平寺に命じた文書など、中世文書が大切に保管されています。

京極氏の遺跡⑤ 弥高寺跡

— 城塞化された山岳寺院（米原市弥高） —

寺伝で役行者を開基とし、伝説的な山林修行者・三修が草創した伊吹山寺の系譜をひく近江最古の山岳寺院のひとつで、中世伊吹修験の中心的寺院でした。しかし、応仁の乱以降、京極家の内紛では山城として機能していたようで、明応4年(1495)に京極政高が「弥高寺より進み」、翌年には京極高清が弥高寺に「御陣」を構えていることが記録にみえます。戦国時代には京極氏が上平寺の館の背後にある当寺を城郭に改修しましたが、寺院は京極氏の退転後も存続し、天文5年(1536)の記録には47の坊院がありました。しかし、浅井氏の滅亡(1573年)後、時を経ずして天正8年(1581)に西山麓に移転しました。城郭遺構としては、南前面に枳形虎口の大門と横堀による防御ラインを設け、本堂背後には、畝状堅堀群を持つ曲輪、さらに背後を巨大な堀切で区切っています。南西側面にも随所に堅堀を設けており、寺域の内部の改変を最低限に抑えながら縁辺部を厳重に防御しています。



弥高寺跡概要図



大門跡



堅堀



坊院跡

参道と石垣

発掘調査の成果

本堂跡の発掘調査では、直径90cm前後の礎石を検出しましたが、残り具合が悪く間隔も統一されていないため本堂の構造は不明です。基壇側面では二段の石積みを検出し、ここまで縁が張り出した大きな建物だったと考えられています。僧坊跡の発掘調査では、三間×六間の庫裏と仏堂を兼ね備えた礎石建物を検出しました。庫裏では火床(囲炉裏)跡を山岳寺院ではじめて発見しました。



関ヶ原盆地と濃尾平野を望む(手前の尾根は上平寺城跡)

10 京極高次の闘い

没落した京極高吉(高慶)は、京極家存続をかけて行動し、永禄11年(1568)には、上洛途上の信長が成菩提院(柏原)に宿泊した際、北近江守護職としての家柄をなげうち、成り上がりの信長に恭順し、高次を人質に出しました。その後、高次は槇島城(京都市)で足利義昭を攻め、幕府を滅亡させた戦いで活躍し、蒲生郡奥島(近江八幡市)五千石を与えられます。

しかし、天正10年、本能寺で信長が自刃すると、高次は、北近江回復を夢見て、羽柴秀吉の長浜城(長浜市)を攻略します。しかし、明智光秀が秀吉に敗れたため、清滝に身を隠し、柴田勝家を頼って北の庄城(福井市)に向いました。

賤ヶ岳の戦いで柴田方に属した高次は、ここでも敗れ、小浜(福井県)の武田氏に嫁いだ妹(姉)を頼りますが、武田氏は秀吉によって滅ぼされ、妹は秀吉の側室(松丸殿)になってしまいます。ここで高次は、妹のとりなしで秀吉に従い、高島郡二千五百石、のちに大溝城一万石を与えられ、この時、浅井長政の次女初と結婚しています。以後も、秀吉のもとで軍功をあげ、八幡山城二万八千石、大津城六万石に封ぜられます。このように、高次は近江国内で着実に加増されていきます。信長や秀吉にとっても、名門京極家の復興と高次が、近江支配にとって必要だったからです。



大溝城天守台跡 (高島市)



八幡山城跡石垣 (近江八幡市)



小浜城跡 (小浜市)



丸亀城跡 (丸亀市)



田辺城跡 (舞鶴市)

11 大津籠城、そして小浜へ

慶長5年(1600)、京極家最後にして最大の危機が訪れます。居城大津城は、大阪・伏見と石田三成の佐和山城の間にあり、東海道の要衝です。大恩ある豊臣家から出陣を頼まれ、家康から味方になるよう誘われます。結局、京極家温存を図る高次は、弟高知を家康に従わせ、自身は二万七千の西軍を大津城に釘づけにしました。

10日前後の猛攻に耐えたさしもの大津城も、9月15日炎上し開城。この日、関ヶ原では家康が大勝していました。灰燼に帰した大津の町と城を眺めた家康は、高次の功が大なることを知り、若狭一国を与えます。武田氏の後瀬山城から、海に面した北川と南川にはさまれた海浜に小浜城を築城し、城下町を整備拡張しました。

高吉・高次親子の生きざまは、一族の血筋を絶やさず、領地を得、家臣を養うために戦いの優勢だと思われる方につくことが正義とされ、寝返りや親子・兄弟で戦うことが正当化された戦国時代の戦いの論理を体現し、名門京極家を復興して江戸時代の繁栄につなげました。

12 その後の京極家

京極氏は高吉の息子である高次・高知兄弟によって再興されました。

関ヶ原の戦いのあと、小浜城主となり若狭を領した京極高次の系譜は、寛永11年(1634)に高次の息子忠高が二四万石で出雲松江城(島根県)に入ります。しかし、忠高に世継ぎが無く同14年に改易されてしまいます。

しかし、大津城における高次の功績を惜しんだ幕府は、甥の高和に播磨龍野藩六万石(兵庫県)を与え、京極宗家は存続しました。高和は万治元年(1658)、讃岐丸亀藩六万石(香川県)に移り、明治維新まで七代212年間続きました。なお、丸亀藩は三代高或のときに多度津藩一万石を分藩しています。

京極高知は、丹後宮津藩一二万三千石を領し、三人の息子が宮津・田辺(舞鶴)・峰山に分かれました。のちに宮津京極家は改易後、旗本に。田辺京極家は、但馬豊岡(兵庫県)に転封し、明治維新を迎えます。

京極高次と初 一京極家再興と三姉妹のあゆみ一

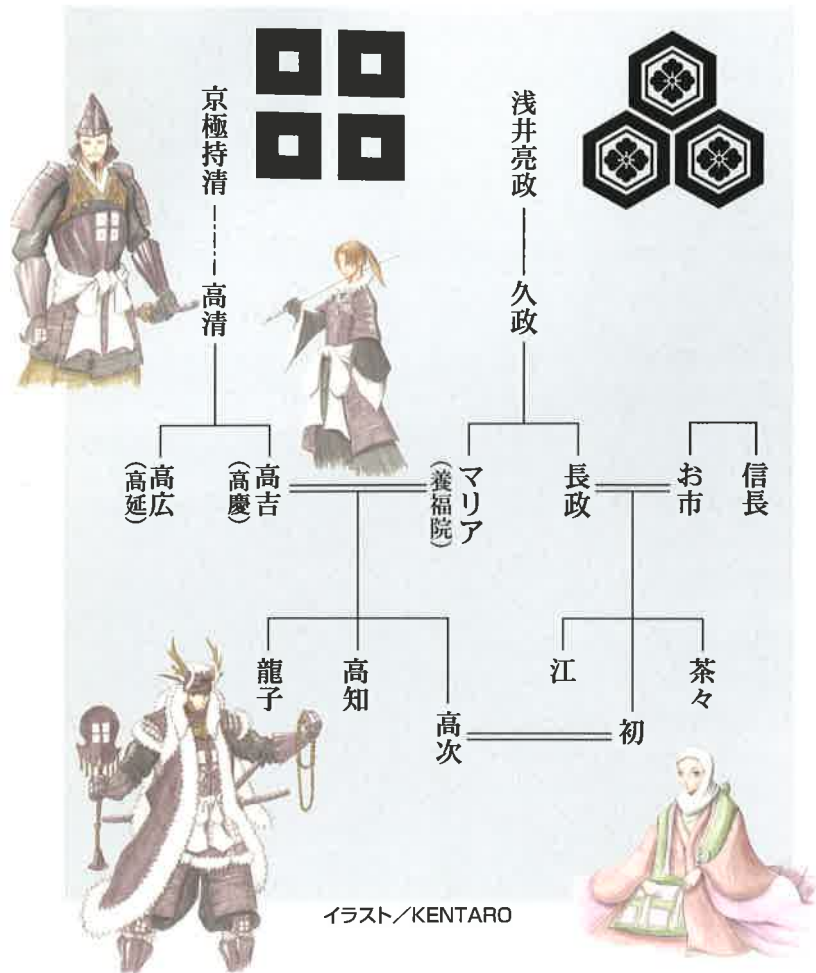
一 名家復興への道一

一 思い出の地・小浜へ一

一 姉妹の間に生きる一

- 永禄6年(1563) 高次誕生 近江小谷城 ※徳源院にも産湯の井戸があります。
- 元亀元年(1570) 高次8歳 人質として岐阜城へ、信長から五〇〇石を賜る
初誕生
- 天正元年(1573) 高次11歳 宇治填島城攻めに従う、近江奥島に五〇〇〇石を賜る
お江誕生 小谷落城、伊勢上野城へ預けられる
- 天正10年(1582) 高次20歳 本能寺の変
京極家復興を目指し長浜城を攻めるが、秀吉に追撃され、清滝寺・柏原・美濃今須・高島郡を経て、北の庄城の柴田勝家を頼る。
お市が柴田勝家と再婚、三姉妹は北の庄城へ
若狭国武田元明室の龍子(松丸殿)が秀吉の側室となり。兄・高次の赦免を嘆願
- 天正11年(1583) 高次21歳 賤ヶ岳合戦・北の庄落城により、越前国山中に蟄居する
- 天正12年(1584) 高次22歳 秀吉から、近江高島郡二五〇〇石を与えられる
江が佐治一成に嫁ぐ(12歳)
- 天正15年(1587) 高次25歳 この頃、高次と初が結婚する
秀吉の九州島津攻めに従う。近江国大溝城 一万石を与えられる。【京極家復興
- 天正16年(1588) この頃、茶々が秀吉の側室となる(20歳)
- 天正18年(1590) 高次28歳 秀吉の小田原北条氏攻めに従う
- 天正19年(1591) 高次29歳 秀吉から、近江国八幡山城二万八〇〇〇石を与えられる
- 文禄2年(1593) 高次31歳 秀吉の肥前国名護屋出張に従う(従卒八〇〇余人)
名護屋城で、秀吉と中国使節との対面の配膳役を務める
江(20歳)が羽柴秀勝に嫁ぐ。秀勝朝鮮出兵中に病死
- 文禄4年(1595) 高次33歳 秀吉から、近江国で六万石を与えられ、大津城主となる
江(23歳)が徳川秀忠(17歳)と結婚する
- 慶長3年(1598) 高次36歳 初が秀吉から近江蒲生郡内で二〇四五石を与えられる
- 慶長5年(1600) 高次38歳 関ヶ原の戦い
6月 家康が大津城に立ち寄り、高次・初等と膳を共にする。
8月 西軍に加わり兵卒二〇〇〇を従え出陣する
9月2日 大津城に帰着し、籠城して西軍に攻囲される
9月15日 大津城を開城し、高野山に退去する
同日 関ヶ原合戦で東軍が勝利する
9月22日 大津城で西軍を足止めした功績により、家康から若狭国八万五〇〇〇石余を与えられ、後瀬山城に入る(のち小浜城を築城)
【夫婦思い出の地】
- 慶長6年(1601) 高次39歳 高次と初、キリシタンの洗礼を受ける
- 慶長14年(1609) 高次47歳 高次、若狭において死去
初は剃髪出家し、常高院と称す
- 慶長19年(1614) 初45歳 大阪冬の陣
初が、淀殿(豊臣)と江(徳川)の仲介に奔走する
- 元和元年(1615) 初46歳 大阪夏の陣で、大阪落城
淀殿(47歳)豊臣秀頼(23歳)で自刃
- 元和2年(1616) 初47歳 徳川家康死去(75歳)
- 元和9年(1623) 初54歳 江が生んだ家光が三代将軍になる
- 寛永3年(1626) 初57歳 江、江戸城で死去(54歳)
- 寛永10年(1633) 初64歳 初、江戸で死去 遺骸は小浜常高寺に葬られる





常高寺 (福井県小浜市)



常高院 (初) の墓 (常高寺)
写真提供 / 小浜市教育委員会

コースガイドマップ① 史跡「京極氏遺跡」周辺

〔所要時間〕 約4時間

〔ルート〕 京極氏館跡 → 上平寺城跡 → 弥高寺跡
 悉地院 → 伊吹山文化資料館

〔みどころ〕

京極氏館跡・上平寺城跡・弥高寺跡ともに、地元の皆さんによって手入れが行き届いており、見学しやすい。とくに弥高寺跡からの眺望は素晴らしい。ただし、春・秋のシーズンには熊などが出没することがあるので、鈴など音の出るものを必ず携帯して行くこと (ヒル・スズメバチにも注意)



コースガイドマップ② 史跡「京極家墓所」周辺

〔所要時間〕 約3時間

〔ルート〕 JR柏原駅 → 柏原宿歴史館 → 成菩提院
 北畠具行墓 → 清滝寺徳源院 (京極家墓所)

〔みどころ〕

中山道の町並みが残る柏原。この地はもともと京極氏の本拠地であった。そのため、街道から少し足をのばすと京極氏ゆかりの地が点在する。徳源院では、春の桜、秋の紅葉が見事





【協力機関・協力者（敬称略）】

高橋 健太郎・伊庭 功・松下 浩・高木 叙子・下仲 隆浩・上平寺区
滋賀県教育委員会・滋賀県埋蔵文化財センター・滋賀県立安土城考古博物館・
長浜市長浜城歴史博物館・長浜市浅井歴史民俗資料館・小浜市教育委員会

京極家激闘譜 — 京極氏の遺跡、信仰、文化 — 2011.3

米原市教育委員会 〒521-0072 滋賀県米原市顔戸281-1 TEL.0749-552-8025 FAX.0749-52-8177